

肢体不自由者に対する災害時の行動と心理に関する調査研究

Study on the behavior and psychology of the physically handicapped people

伊藤 昌夫*
熊倉 孝行*
松本 あや子*
渡橋 浩子**

概要

体の不自由な方のうち、主として四肢や体幹が不自由な人達の、火災や地震などに対する防災意識や防災行動力の実態を把握し、震災対策や防災指導に反映させるため、アンケート調査を行なった。

主な結果については次のとおりである。

- 1 自宅で火災が発生した時の初期対応では、約7割の人が119番通報ならできると答えているが、何もできないと思っている人も6人に1人いる。
- 2 防災訓練の経験者は約半数いるが、障害を受けた後に参加した訓練内容は、防災映画・防災講演会や通報訓練など、比較的身体を動かさなくてもよいものが多い。
- 3 阪神・淡路大震災のような直下型地震の発生については非常に不安に思っている人が多く、特に避難所までの避難について心配している。
- 4 当庁が進めている隣保共助体制づくりを必要だと思う人は圧倒的に多く、特に火災や地震が発生した時などの緊急時の助け合いを強く望んでいる。

We sent out a questionnaires to people with disabilities in their limbs or bodies to know their awareness on disasters such as fires and earthquakes, and their response capabilities. The result will be reflected on our Department's disaster plans and education for citizens. The findings were as follows.

- 1 When a fire occurs at home, 70% say they can make a 119 call, but one out of six thinks they can not do anything.
- 2 About half of the respondents have taken part in disaster drills. But the drills they participated after becoming disabled are limited to those which do not require much physical movement, such as disaster movies, lectures and emergency reporting drills.
- 3 Many of them fear the breakout of an earthquake directly under the city such as the Great Hanshin-Awaji Earthquake. They are especially concerned about how they can get to the refuge area.
- 4 The majority of the responders think the neighborhood mutual support system, which the Tokyo Fire Department is promoting, is most necessary. They strongly want support from their neighbors in emergencies such as fires and earthquakes.

1 はじめに

平成5年度より実施している「災害時の行動と心理に関する研究」の一環として、今回は肢体不自由者に対してアンケート調査をおこなった。

これら四肢や体幹が不自由な人達は、火災や地震などの災害に遭遇した際、健常者より消火・通報・避難といった防災行動力が弱いと考えられる。

そのため本調査では、肢体不自由者が日常において災害に対しどのような備えをおこない、自身がどの程度の

行動力を示せると考えているのか、及び消防施策の周知度等について把握し、今後の災害弱者対策や訓練及び防災知識の普及において反映させることを目的としている。

2 調査方法等

- (1) 調査期間
平成9年2月17日から同年3月17日まで
- (2) 調査対象者
本調査にあたっては地域特性を考慮して、下町地域(墨田区・台東区)、山の手地域(渋谷区)及び多摩地域(武蔵野市)の主に肢体不自由者が多数を占める障

*第四研究室 **小石川消防署

害者福祉団体に所属する500名にアンケート用紙を配付し、有効回答を得られた352部について調査集計した。

したがって、本調査は全ての肢体不自由の人達の意見を代表するものではない。

対象者の構成にあつては、年代別に見ると60歳代・70歳代が多く、身体障害者手帳における障害の等級別では、2級が最も多い。また、障害の部位で最も多かったのは下肢機能障害であった。(表1)

表1 調査対象者構成表

地区別	人数	年代別	人数	等級別	人数	障害の種類	人数
墨田区	42	30歳未満	5	1級	57	上肢機能	35
台東区	97	30歳代	8	2級	100	下肢機能	139
渋谷区	111	40歳代	25	3級	76	四肢機能	66
武蔵野市	102	50歳代	61	4級	63	体幹機能	67
		60歳代	106	5級	33	四肢・体幹	27
		70歳以上	144	6級	6	その他	15
		無回答等	3	その他等	9	無回答等	16
				無回答等	8		

(3) アンケート質問項目

別記のとおり。

(4) 調査方法

各団体を通じて対象者にアンケート用紙を配付し、対象者各個人から郵送にて送付してもらった。

3 調査結果

本調査結果を求めるにあたっては、肢体不自由以外の障害のみを回答したもの等を除いた有効回答352部について単純集計及びクロス集計をおこなった。また、明確に示された回答だけを分析するため、無回答にあつては各質問項目ごとの集計の母数から除いた。

調査結果は、(1)火災について(2)防災訓練について(3)地震について(4)消防施策について、の4点にまとめて以下のように集計した。

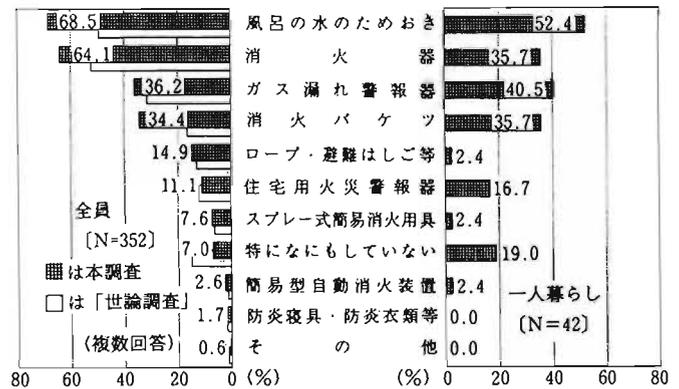
なお本調査と比較するため、「消防に関する世論調査(平成8年11月東京消防庁指導広報部広報課)」(以下、「世論調査」とする)と、「高齢者に対する災害時の行動と心理に関するアンケート調査結果(平成7年3月東京消防庁消防科学研究所第四研究室)」の中の一般高齢者(以下、「一般高齢者」とする)の集計結果を用いた。

(1) 火災について

ア 火災に備えて用意しているもの

家庭内にて、火災に備えて用意しているものは、「風呂の水のためおき」や「消火器」が多い。(グラフ1)

しかし、一人暮らしの人たちだけで集計すると、「消火器」や「ロープ・避難はしご」が減少し、逆に「何もしていない」が多い。(グラフ2)



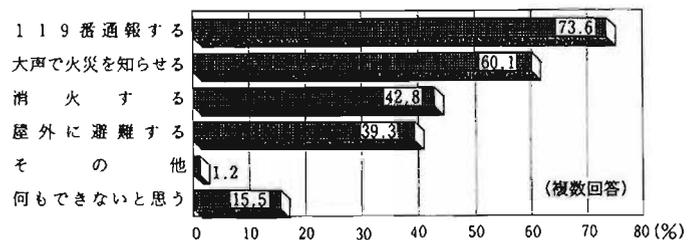
グラフ1 火災の備え (全員)

グラフ2 火災の備え (一人暮らし)

「世論調査」との比較では、「風呂の水のためおき」や「消火器」の備えの割合が多く、逆に「何もしていない」が少ない。全般的に、本調査の肢体不自由者世帯は一般世帯と比較すると防災意識が高い傾向にある。(グラフ1)

イ 火災が発生した時にできること

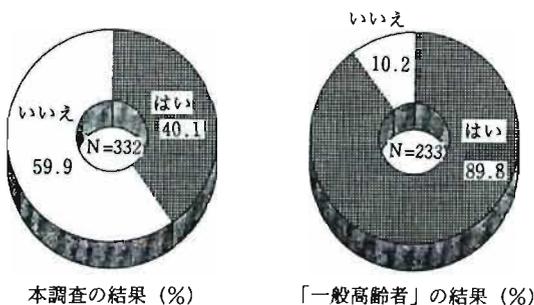
自宅で火災が発生した時にできることについての質問では、「119番通報する」「大声で火災を知らせる」が多いが、「何もできない」と思っている人も15.5%いる。(グラフ3)



グラフ3 火災が発生した時にできること

ウ 火災が発生した時に逃げられる自信

「一般高齢者」では89.9%が逃げられると回答しているのに対し、肢体不自由者では半数以下にとどまっている。(グラフ4)



グラフ4 火災が発生した時に逃げる自信はありますか

とくに避難にあたって困難が予想される、下肢や体幹に1～2級程度の重い障害がある一人暮らしの人(本調査では13名)では、「逃げる自信がある」と回答した人は1人だけであった。

グラフ5は、グラフ4で「いいえ」と回答した192人に対し、「火災の時に逃げる自信がない」と考える理由について質問したものである。「速く歩くことができない」という回答が多いが、3人に1人はそれぞれ「家に階段や段差が多い」ことや、「普段2階に寝ているから」など、住宅事情を理由に挙げている。



グラフ5 火災発生時に逃げる自信がない理由

(2) 防災訓練について

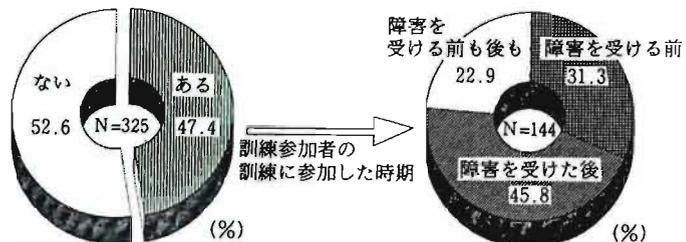
ア 防災訓練等の参加状況

防災訓練や防災講演会の参加経験についての質問では、1回以上参加したことのある人は47.4%で、「一般高齢者」の58.8%、「世論調査」の60.1%に比べて低くなっている。(グラフ6)

さらに、今回調査対象とした団体の中には毎年防災訓練を開催している団体もあり、本数値は肢体不自由者全体からみれば参加率が高い傾向がある。

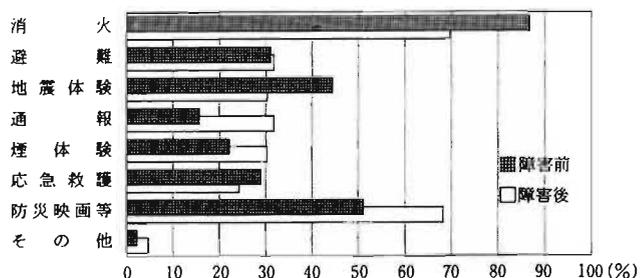
他県の調査では、肢体不自由者の訓練参加率が22%というところもある。

1回以上訓練参加経験のある人に、参加した時期を聞いたところ、障害を受けた後に参加した人の割合が多い。(グラフ7)



グラフ6 訓練の参加経験 グラフ7 訓練の参加時期

しかし、参加した訓練の内容では、障害を受ける前に比べ、障害を受けた後では防災映画・講演会や通報訓練といった比較的身体を使わなくても参加できるものが増えている。(グラフ8)

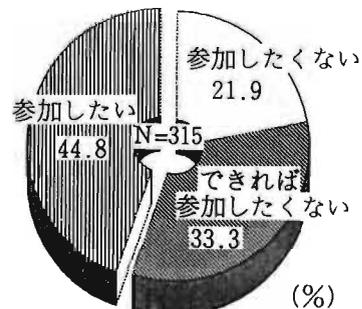


グラフ8 参加訓練種別

イ 訓練への参加意欲について

防災訓練に参加したいと思うか聞いたところ、「参加したい」と答えた人は、44.8%で「一般高齢者」の防災訓練の参加希望者39.1%に比べ高い。前アの訓練の参加経験と合わせて見ると、本調査の肢体不自由者は「一般高齢者」に比べ訓練参加経験者は少ないが、参加を希望している人は多い傾向にある。(グラフ9)

また、「できれば参加したくない」「参加したくない」と答えた人からその理由を聞くと、「体が不自由だから」(83.2%)が多数を占めた。(表2)



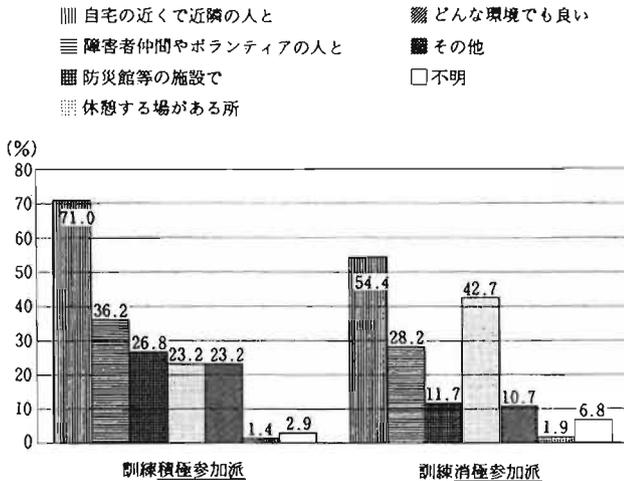
グラフ9 訓練参加意欲

表2 参加したくない理由(複数回答)
(できれば参加したくないを含む)

項目	%
体が不自由だから	83.2
疲れるから	29.1
介助者に負担がかかるから	20.9
人前に出たくないから	10.2
何回も出ているのもういい	5.1
わかりにくいから	4.6
その他	9.2

ウ 訓練への参加について

もし訓練に参加するとすれば、どのような環境であればよいか、またはどのような人々と実施したいかという質問では、前イにおいて、防災訓練に「参加したい」と思っている約4割の「訓練積極参加派」は、「自宅の近くで近隣の人と」実施したいと考えている人が多い。(グラフ10)

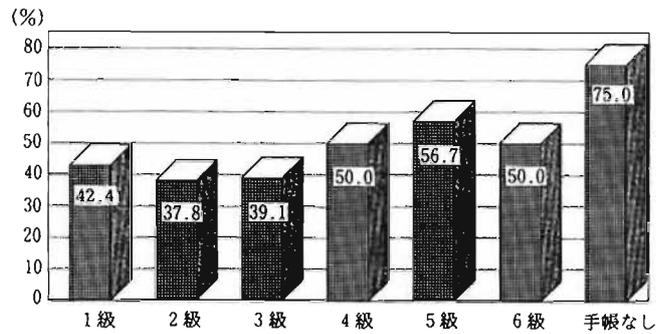


グラフ10 訓練参加意欲と訓練時の環境等への希望

「できれば参加したくない」と思っている「やや参加消極派」(約3割)は、「自宅の近くで近隣の人と」、訓練会場内に「休憩する場所」を希望する割合が高くなっている。

エ 訓練参加意欲と障害の程度について

障害の程度が重い人ほど防災訓練に参加しながらない傾向にあるが、等級が1級の人でも参加を希望している人がいる。(グラフ11)

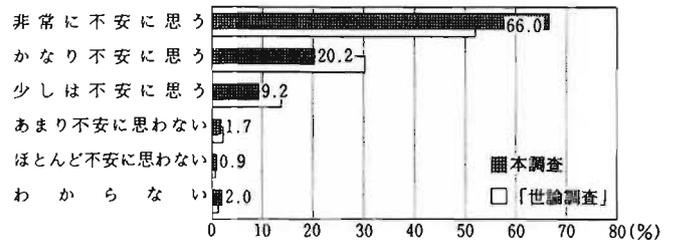


グラフ11 訓練に参加したいと思う人の障害の程度

(3) 地震について

ア 地震に対する不安感

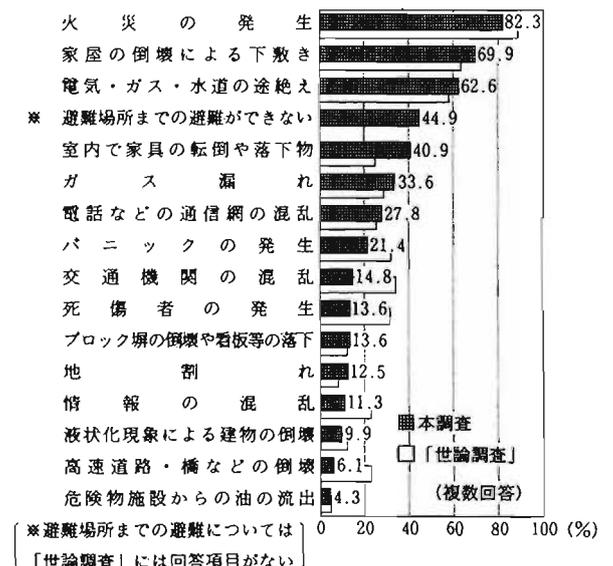
これについては、「非常に不安に思う」が最も多く、「世論調査」との比較でも高い割合を示している。(グラフ12)



グラフ12 地震の不安度

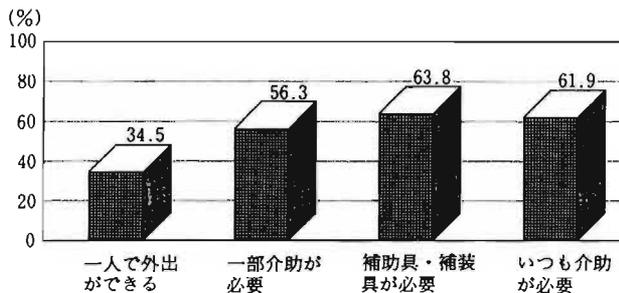
イ 地震発生時に何が不安か

地震発生時の不安要因としては、「火災の発生」「家屋の倒壊による下敷き」「室内での家具の転倒や落下物」などの生命危険、ライフラインの途絶えなどのほか、避難場所までの避難困難をあげている人が多い。(グラフ13)



グラフ13 地震発生時の不安要素

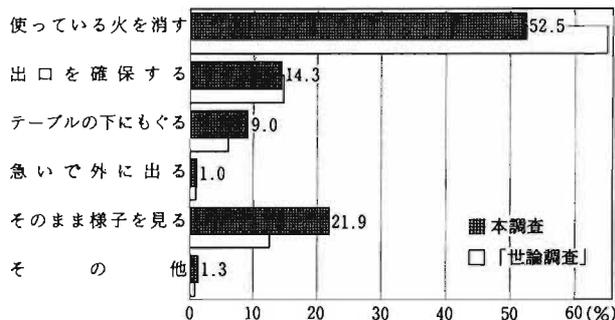
避難場所までの避難ができないと回答している人だけについて、外出時の介助等の要否別に分けると、介助の項で「一部介助があれば外出できる」「補助具・補装具があれば外出できる」「いつも介助がなければ外出できない」等の回答をしている人たちに、避難場所まで避難できないと思っている人が多い。(グラフ14)



グラフ14 避難場所まで避難できないと思う (介助等の要否別)

ウ 震度4の地震発生で、まず行なう初動措置

地震発生時には、まっ先に「使っている火を消す」が多いが、世論調査との比較では13%少なく、逆に「そのまま様子を見る」が多かった。(グラフ15)

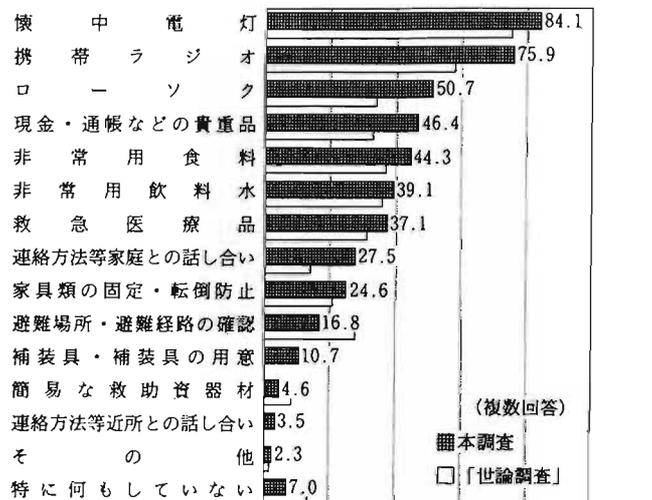


グラフ15 地震発生時の行動

エ 地震に対する備え

地震に備えて用意しているものは、「懐中電灯」「携帯ラジオ」などが多い。「世論調査」との比較では、一般的に本調査結果の方が回答率が高くなっているが、「非常時の連絡など家族との話し合い」では回答率がほぼ倍増しており、障害者世帯の防災意識は高くなっている。

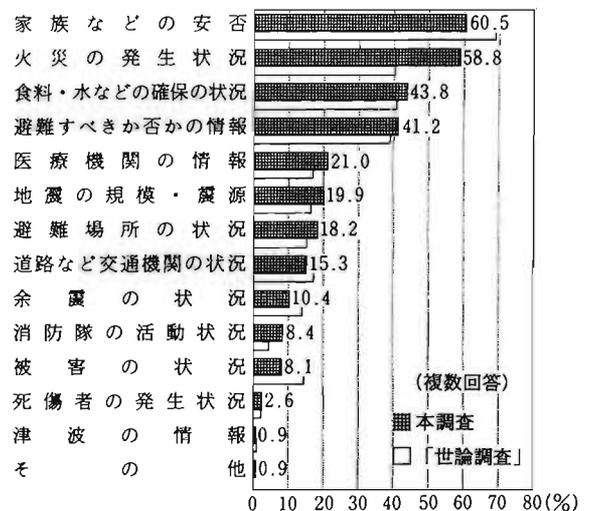
また、前イの地震時の不安要素として「室内での家具の転倒や落下物」を40.9%の人があげているが、実際に「家具類の固定・転倒防止」を行っている人は24.6%にすぎない。(グラフ16)



グラフ16 地震に対する備え

オ 地震が発生した場合に知りたい情報

これについては、一般的に「世論調査」の結果と大きな差異はないが、「火災の発生状況」がやや多くなっている。(グラフ17)



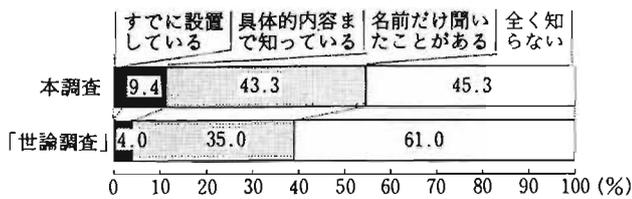
グラフ17 地震発生時に知りたい情報

(4) 消防施策について

ア 緊急通報システムの周知度

緊急通報システムをすでに設置している人が2.0%、具体的内容まで知っている人が9.4%おり、「世論調査」結果に比べ知名度は高く、半数以上の人が緊急通報システムという名称を知っている。(グラフ18)

また、18歳以上の一人暮らしで障害の程度が1～2級の人、70歳以上で一人暮らしまたは高齢者世帯の人たち(緊急通報システム設置基準に近い人)だけを抽出して分析したところでは、緊急通報システムについて「具体的内容まで知っている」人の割合が倍増するなどさらに知名度は上がっているが、「全く知らない」人もなお40.8%いた。

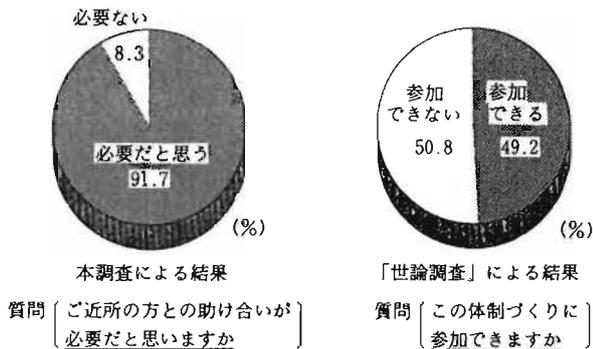


※「世論調査」では、「すでに設置している」という回答肢はない。

グラフ18 緊急通報システムの周知度

イ 隣保共助体制の必要性

隣近所の人たちが助け合う隣保共助体制づくりをほとんどの人達が必要だと思っている。(グラフ19)

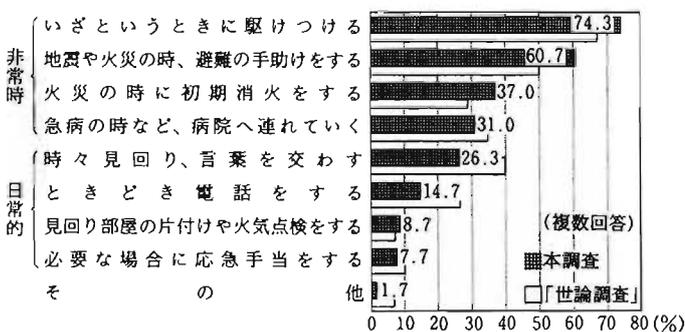


グラフ19 隣保共助体制の必要性

また、本調査の設問が「あなたは、このようなご近所の方との助け合いが必要だと思えますか。」というのに対し、世論調査では「あなたは、この体制づくりに参加できますか。」と若干異なるが、一方は災害に弱い立場にある人々、他方は一般都民の意見を表した結果と言え、隣保共助体制に参加できると答えた一般の人は49.2%となっている。

ウ 隣保共助にのぞむ助け合い

グラフ19で、隣保共助体制づくりを必要だと回答した91.7%の人達に、具体的にどのようなことを望むかという質問では、「世論調査」結果と著しい差はなく、災害弱者側と一般都民側で望むものがほぼ一致しているといえる。しかし、「いざという時に駆けつける」「地震の時、避難の手助けをする」「火災の

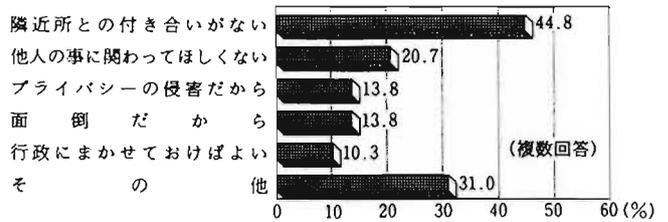


グラフ20 隣保共助体制に望むこと

ときに初期消火をする」などがやや多く、「時々見回り、言葉を交わす」「時々電話をする」などが少ない。(グラフ20)

エ 隣保共助体制が必要でない理由

グラフ19で、隣保共助体制づくりを必要ないと思っている8.3%の人たちに、その必要ない理由を尋ねた質問では、「隣近所との付き合いがない」のほか、「他人の事に関わってほしくない」などの回答があった。(グラフ21)



グラフ21 隣保共助体制が必要でない理由

その他の意見では、「必要ないとは思わないが、家族のプライバシーを考えると」、「昼間近所に人がいないから」、「家族がしっかりしているから」などがあつた。

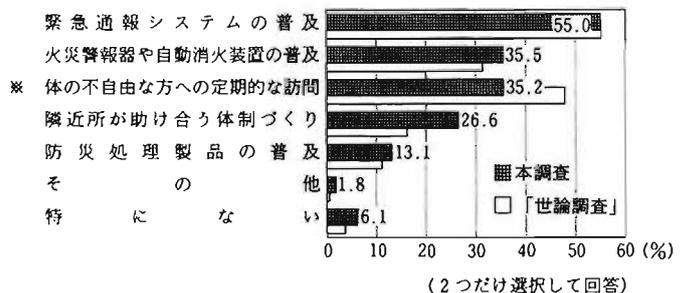
オ 災害弱者に対する防火診断

当庁で実施している、体の不自由な方々や高齢者に対する防火診断については、「来てほしい」など前向きな意見が86.0%を占めており、否定的な意見は0.9%にすぎなかった。

カ 希望する防火安全対策

当庁が進めている防火安全対策の中で、特に強く希望するものを2つ選んでもらう質問では、「世論調査」と同様に「緊急通報システムの普及」が最も多かった。

「世論調査」で2番目に多かった「住まいへの定期的な訪問」がやや低く、「隣近所が助け合う体制づくり」は高い傾向にある。(グラフ22)



※「世論調査」の質問では「高齢者世帯の定期的な訪問」となっている。

グラフ22 希望する防火安全対策

4 考 察

体の不自由な人達は、その障害の部位などにより身体障害者福祉法に基づいて視覚障害、聴覚言語障害、肢体不自由、内部障害に分かれる。また障害の程度の表し方として1級から7級までであることから、体の不自由な人達が災害遭遇時の対応行動や心理もそれぞれ異なることが十分予想される。そこで今回は、主に四肢や体幹に障害のある人達を対象として、火災や地震の発生時に何らかの方法で、自ら初期対応がとれると思われる人達を中心に調査を実施した。

肢体不自由者の場合、障害の程度は1級が重く、7級（身体障害者手帳は6級まで）が軽いと考えるのが一応の目安となるが、同じ3級でも上肢と下肢では防災上の個々の作業・動作で不自由度は異なってくる。さらに他の障害と重複している人たちもいる。したがって、体の不自由な人たちへの防災上の呼びかけや指導は、それぞれの人の障害の程度等を含めた立場にたって実施していく必要がある。

こうした状況を踏まえ、調査結果から以下のことを考察した。

(1) 肢体不自由の人のいる世帯は一般世帯より防災意識が高い。

「世論調査」に比べ、消火のための風呂水のためおきや、消火器の用意が多く世帯でされており、また地震に備えて非常時の連絡方法などを家族で話し合っている割合が高いなど、防災意識が高いことがうかがわれる。家族は肢体が不自由な人たちのことを最もよく知っていることから、火災発生時に避難が遅れやすいことなどを十分理解しているためと思われる。

その反面、一人暮らしの人は5人に1人は何の備えもしていないと回答している。身近に親しい家族等と一緒にいない一人暮らしの人（本調査では13%を占めている）は、いざという時も全て自分で行動しなければならず、火災や地震に対する備えを一層万全にし、最も防災訓練等に参加してほしい人たちといえる。このような一人暮らしの人たちには、防災指導を重点的に推進し、防災機器の設置や防災訓練への参加、隣保共助体制の推進などを呼びかける必要があると考えられる。

(2) 火災が発生しても速く歩けないので逃げられないと思っている人が多い。

肢体不自由者の人たちの5人中3人までが、火災が発生しても逃げられないと思っている。健常者には何

でもない階段や段差が、足の不自由な人達には移動の妨げとなり、速く歩くことができないこと、補装具を装着したり補助具をつかうのに時間を要すること、または介助がなければそうしたことができないことなどのほか、今回の調査では6割の人たちが2階以上で就寝していることなど、避難を困難なものにする要素は多い。

さらに平成5年度に第四研究室で実施した「住宅火災遭遇者に対するアンケート調査」結果によると、火災を知る手掛かりは「煙」と「物音」など視覚と聴覚によるところが大きいとされているが、その一方で、高齢になるほど視力と聴力が劣る傾向にあるため（「新版 老年心理学」参考）高齢で肢体の不自由な人たちは、火災に気付くのが遅れることが予想される。したがって肢体不自由者世帯、特に高齢の肢体不自由者世帯では、視覚聴覚に頼らずに早期に火災を発見し、避難する時間を稼げるよう家庭用の自動火災警報器等の設置促進を図るとともに、避難しやすい避難階での就寝を呼びかけることなどが必要と考えられる。

(3) 肢体不自由者は「一般高齢者」に比べ、訓練参加者は少ないが訓練参加希望者は多い。

障害を受けた後に訓練に参加したことのある人のうち半数を超える人たちは、3回以上訓練に参加している。このように訓練を経験した人は繰り返し参加している場合も多いが、全体からみると、訓練の参加経験のある人は半数以下であり、さらに障害を受けた後だけに参加した人をみると3人に1人の割合である。また本調査は障害者団体に所属されている人達を対象にしたこと、団体の中には団体ぐるみで毎年防災訓練に参加しているところもあることなどから、一般的な肢体不自由の人たちはさらに訓練参加経験が少ないことが予想される。訓練参加経験者が少ない理由は、体が不自由であるため参加したくてもできないことなどの他に様々な理由が挙げられており、障害の程度が重い人の方が訓練経験者は少ない傾向にある。しかし訓練に参加したいと思っている人は「一般高齢者」に比べ多く、障害の程度が重い人や、いつも介助がないと外出できない人の中にも参加を希望している人は多い。

このようなことを踏まえ、体が不自由だから防災訓練は無理だろうと思うことなく、てはじめに防災映画や防災講演会などの比較的体に負担がかからない、無理なくできるものから訓練種別を選定して参加を呼びかけたり、比較的障害の程度が軽度でも参加しようと思わない人たちに対しては、体の不自由な人たちだけで集まってもらって訓練を行ったり、逆に近隣者と一緒に行ったりと、参加したいと思う訓練環境を用

意することも一方法であると考えられる。

また、杖や補装具などが必要な人、また必要としない人たちにとっても、長時間立っていたり歩いたりすることは苦痛であり、休憩する場所がないことがこれらの人たちの訓練参加の妨げとなっていることが考えられる。「できれば訓練に参加したくない」という訓練参加に消極的な人たちが、訓練時にイスなどの休憩する場所があることを望んでいるように、このような準備をすれば訓練参加率が高まることが十分考えられる。

(4) 震災時に避難場所まで避難できないと考えている人は多い。

一人で外出できますかという質問のその他欄で、「外出できるが遠くまではとても無理」「バスのステップに上がれない」などの記述が見られた。これは道路、駅、建物等生活環境面での物理的な障壁の除去に取り組もうというバリアフリーの呼びかけによって、公共施設や交通機関などを中心に少しずつではあるが階段のエスカレーター設置、車椅子で入れるトイレなどが見られるようになってきたが、日常の道路では歩道の段差、電信柱、歩道に乗り上げている違法駐車、看板など、体の不自由な人たちの通行が困難となるものが数多く存在する。ましてや災害時には多くの避難者、路上の散乱物なども加わる。体の不自由な人たちは、通常の火災の時でも建物の中から避難する自信がないと思っている人が多いので、震災時の避難場所までの通行における困難性は容易に想像がつく。さらに介助をする家族等の同居者がいない一人暮らしの人達にとっては、より大きな問題と言えよう。

(5) 緊急通報システムを半数以上の人知っている。

緊急通報システムについては、当庁を含めた関係行政機関等で設置促進を図っているところである。本調査の中でも既に7人の人が設置しており、また具体的内容まで知っている人は「世論調査」の2倍を超えていた。高齢で一人暮らしの人や高齢者世帯あるいは一人暮らしで障害の程度が1級～2級の人たち(76人)においては、具体的内容まで知っている人は「世論調査」の4倍以上に達していた。当庁が推進している防火安全対策のなかで、今回の調査対象者のうち55%の人が緊急通報システムの普及を希望していることから、次に述べる隣保共助体制を踏まえた、同システムの円滑な導入を推進するとともに、介助が得られにくく災害発生時に避難上困難が予想される一人暮らしの人たちには、特に早期に火災を発見する必要があることから、住宅用火災警報器や自動消火装置などと合わせ、今後も緊急通報システムの普及を一層推進する必

要があると考えられる。

(6) 隣保共助体制づくりを多くの人が必要だと思っている。

9割以上の方が隣近所の人との助け合う体制を必要だと思っており、特に火災や地震の時に駆けつけて消火をしたり、避難の手助けをする助け合いを望んでいる。

このことは、阪神・淡路大震災のような直下型地震の発生を非常に不安に思っていること、火災発生時に逃げられないと思っている人が多いことなどから考えれば当然であるといえる。しかしその反面、地震に備えて近所の人と話し合いをしている人が少なかったり、時々災害弱者家庭を見回り、部屋の片付けや火気点検すること、時々電話をしたり声を掛けたりするような日常的な付き合いは、それほど多くの人が望んでいるわけではなく、日常生活よりは災害時の助け合いを強く希望する人が多い。また、少数であるが他人のことに関わってほしくないとかプライバシーの侵害だから、という理由から、このような体制づくりに否定的な人もいることを十分考慮しながら推進することが必要であろう。

5 要 約

肢体不自由者が備えている防災知識や防災行動力の意識を把握して今後の災害弱者対策等に反映させるため、都内3区1市の障害者団体に所属する500名を対象にアンケート調査を実施した。

調査は、平成9年2月17日から3月17日までの間に行なわれ、有効回答352部を得た。

その結果を4点にまとめて以下に示すと、

(1) 火災について

全般的に本調査の肢体不自由者世帯は、一般世帯と比較すると防災意識が高いが、一人暮らしの人達は「特に何もしていない」と答える割合が多かった。

自宅で火災が起きた時の初期対応では、「通報」するとの答えが多かったが、「何もできない」と思っている人も15.5%いた。

火災時に避難する自信がある人は40.1%と半数以下にとどまった。理由としては、「速く歩くことができない」が多かったが、階段等の住宅事情を挙げている人もいた。

(2) 防災訓練について

訓練の参加経験がある人は、「一般高齢者」や「世論調査」に比べて低くなっている。障害後に参加した訓練内容では防災映画や講演会、通報訓練といった体を

動かさないものが多くなっている。

また、防災訓練に参加したいと答えた人は「一般高齢者」より高く、訓練参加経験者は少ないが参加希望者は多い傾向にある。

訓練する環境等について聞いたところでは、「自宅の近くで近隣の人と」行ないたいとする人が多い。訓練にあまり参加したくないと考えている人では、「自宅の近くで近隣の人と」「訓練会場内に休憩する場所」を希望する人が多かった。

障害の等級では程度の重い人ほど訓練に参加したがる傾向にあるが、最も障害程度の重い1級の人でも参加を希望している人がいる。

(3) 地震について

地震を非常に不安に思っている人が多く、その要因としては、「火災の発生」「家屋の倒壊」などの生命危険、ライフラインの途絶えのほか、避難場所までの避難についてあげている人が多い。

避難場所までの避難について不安に思っている人を外出時の介助等の要否別に見てみると、「補助具・補装具があれば外出できる」「いつも介助がなければ外出できない」等の人が多かった。

初動措置では「使っている火を消す」と回答した人が多かったが「世論調査」よりは低く、逆に「そのまま様子を見る」人が多かった。

地震に対する防災意識は高いが、「室内での家具の転倒や落下物」を不安に思っている人が40.9%いたにもかかわらず、「家具類の固定等」をしている人は24.6%にすぎなかった。

(4) 消防施策について

「世論調査」に較べると緊急通報システムの周知度は高いが、全く知らない人も4割程度いる。

ほとんどの人は隣保共助体制づくりを必要だと思っており(91.7%)、具体的には「いざという時に駆けつける」「避難の手助けをする」が多く希望されているが、「時々見回り、言葉を交わす」等は少なかった。

隣保共助体制づくりが必要でないとした、少数派の理由では「隣近所との付き合いがない」などとなっていた。

防火診断については「来てほしい」などが多数を占め、否定的な意見は0.9%であった。

今後、防火安全対策の中でより希望するものとしては「緊急通報システムの普及」が最も多かった。

本調査にあたりご指導頂きました日本大学文理学部の村井健祐教授、並びにご協力頂きました各障害者福祉団体及び各関係行政機関の皆様には厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1 東京消防庁指導広報部広報課 平成8年11月「消防に関する世論調査」
- 2 東京消防庁消防科学研究所第四研究室 平成7年「高齢者に対する災害時の行動と心理に関するアンケート調査結果」消防科学研究所報 第32号 P 155～P164
- 3 井上勝也・木村 周 平成5年4月「新版 老年心理学」朝倉書店

参考文献

- 1 厚生省社会・援護局監修 平成8年2月「体の不自由な人びとの福祉」(財)テクノエイド協会
- 2 埼玉県身体障害者社会参加促進センター 平成8年3月「障害者の防災ニーズ調査報告書」
- 3 全国肢体不自由児・者父母の会連合会 平成7年3月、同8年3月「肢体不自由児・者の暮らしに関する調査研究(第1次・第2次)」
- 4 全日本自治団体労働組合 平成7年「災害に強いまちづくりと災害救助のあり方」
- 5 財団法人身体障害者福祉協会 平成7年「地震・火事・その他の災害時における身体障害者の対応策について」アンケート調査報告書
- 6 東大和市 平成5年3月「市民意識・実態調査 障害者編」
- 7 東京都社会福祉協議会 平成8年9月「東京都区市町村社会福祉協議会の現況」
- 8 東京都福祉局 平成7年4月「社会福祉施設等一覧(平成7年版)」
- 9 東京都福祉局総務部 平成8年8月「社会福祉の手引'96」
- 10 渋谷区 平成8年3月「ノーマライゼーションの理念の定着を目指して」
- 11 渋谷区 平成8年3月「渋谷区障害者保健福祉計画策定のための基礎調査」
- 12 墨田区防災課 災害弱者と家族のための防災マニュアル「いざという時のために」
- 13 武蔵野市保健福祉部 平成8年9月「平成8年版武蔵野の福祉」
- 14 東京都福祉局障害福祉部 平成9年3月「平成8年度障害者福祉施策の概要」
- 15 東京都福祉局総務部 平成8年1月「身体障害者(児)及び精神薄弱者(児)の状況」
- 16 東京都福祉局総務部 平成8年12月「社会福祉統計年報」

火災についてお聞きします

～ 備えているもの・ヒヤッとした経験・避難など ～

質問1. あなたの家では、火災に備えて何か用意をしていますか。(いくつでも)

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1. 風呂の水のためおき | 7. 簡易型自動消火装置(注2) |
| 2. 消火器 | 8. ガス漏れ警報器 |
| 3. 消火バケツ | 9. ロープ・避難はしごなどの避難器具 |
| 4. スプレー式簡易消火用具 | 10. 特に何もしていない |
| 5. 防災寝具・防災衣類などの防災製品 | 11. その他() |
| 6. 住宅用火災警報器(注1) | |

(注1) 住宅用火災警報器: 火災により発生した熱や煙を感じるとブザーがなるもの。乾電池使用のものが多く、簡単に自分で取り付けられる。
(注2) 簡易型自動消火装置: 火災で発生した熱を感知し、自動的に消火薬剤が出るもの。

質問2. あなたが火災予防上普段から気をつけていることは何ですか。(いくつでも)

1. 寝たばこをしないようにしている
2. 火を使う器具の周囲に燃えやすい物を置かない、またはカーテンなどの近くでストーブを使わないようにしている
3. 就寝前や外出前には必ずガスの元栓を確認している
4. 放火されないよう、夜間は家の周囲に燃える物を置かないようにしている
5. ガスコンロを使用中は絶対その場を離れないようにしている、または火を消してからその場を離れるようにしている
6. 年に1回程度、定期的にガス・電気器具などの点検を行なっている
7. 特に何もない
8. その他()

質問3. いままでに次のような経験がありますか。(いくつでも)

- | | |
|--------------------------------|------------------------|
| 1. やかんやなべを空だきした | 6. 火をつけたままの灯油ストーブに給油した |
| 2. 風呂をからだきした | 7. ストーブの火で近くのものをこがした |
| 3. 揚げ物用の油の入ったなべを火にかけたままその場を離れた | 8. たき火の火が急に大きくなった |
| 4. コンロの火で近くのものをこがした | 9. 電気製品が異常に熱くなった |
| 5. タバコなどの不始末で布団や畳などをこがした | 10. 特に何もない |
| | 11. その他() |

質問4. もし、自宅で火災が発生した場合、あなたほどのようなことができますか。(いくつでも)

- | | |
|---------------|--------------|
| 1. 大声で火災を知らせる | 4. 消火する |
| 2. 119番通報する | 5. 何もできないと思う |
| 3. 屋外に避難する | 6. その他() |

質問5. もし、自宅で火災が発生した場合、逃げられる自信がありますか。

- | | |
|-------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
|-------|--------|

質問5-(2). いいえに○をつけた方だけお答えください。自信がない理由は何ですか。(いくつでも)

1. 速く歩いたり、走ったりすることができないので
2. 火災に気付くのがとかく遅くなりがちだと思うから
3. 家に階段や段差が多くあるから
4. 普段、2階に寝ているから
5. 気が動転すると思うから
6. 普段まわりに助けてくれそうな人がいないから
7. その他()

次ページの質問6へ

次ページの質問5へ

防災訓練についてお聞きします

～ 訓練への参加状況・参加したい訓練・訓練に望むこと ～

質問6. 火災にあった時に備え、避難訓練や通報訓練などのような防災訓練・防災講演会に参加したことがありますか。

- | | |
|-------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
|-------|--------|

質問6-(2). はいに○をつけた方だけお答えください。あなたが過去に参加した防災訓練の良點を、体に障害を受ける前と後に分けて教えてください。

体に障害を受ける前の訓練参加回数	体に障害を受けた後の訓練参加回数
1. 0回	1. 0回
2. 1回	2. 1回
3. 2回	3. 2回
4. 3回以上	4. 3回以上

質問6-(3). 次にかける防災訓練の中で、あなたが過去に行なったことのあるものを教えてください。(いくつでも)

1. 消火(消火器や水バケツなどで火を消す訓練)
2. 避難(建物の中から、非常階段や非常口を使用して安全に避難する訓練)
3. 地震体験(地震の揺れを体験できる起震車などを使った訓練)
4. 通報(電話で火災の発生を知らせたり、救急車を要請する訓練)
5. 煙体験(煙の中を避難する訓練)
6. 応急処置(ケガの手当てや人工呼吸などの訓練)
7. 映画や講演会など(地震や火災の映画を見たり、消防署員の話聞く)
8. その他()

次ページの質問7へ

質問7. 次にかける防災訓練の中で、あなたが最も体験する必要があると思う訓練は何ですか。(一つだけ)

- | | | |
|---------|---------|-------------|
| 1. 消火 | 4. 通報 | 7. 映画や講演会など |
| 2. 避難 | 5. 煙体験 | 8. その他() |
| 3. 地震体験 | 6. 応急処置 | |

質問8. あなたが防災訓練をするとしたら、どのような環境あるいは状況がよいですか。(いくつでも)

1. 自宅の近くで、近隣の人を含めて行なう
2. 多少遠くても、同じようなハンディキャップのある仲間やボランティア団体で行なう
3. 都内にあり、火災や地震についての体験学習ができる防災館のような設備の整った施設で行なう
4. イスなどの体験する場所が用意されているところで行なう
5. どんな環境、状況でも良い
6. その他()

質問9. 防災訓練に参加したいと思いますか。

- | | | |
|----------|----------------|------------|
| 1. 参加したい | 2. できれば参加したくない | 3. 参加したくない |
|----------|----------------|------------|

質問9-(2). 上の質問で「できれば参加したくない」と「参加したくない」と答えた方にお聞きします。それはなぜですか。(いくつでも)

- | | |
|------------------------|-----------------|
| 1. 寝れるから | 5. 体が不自由だから |
| 2. わかりにくいから | 6. 人前に出たくないから |
| 3. 何回も出ているので、もういいと思うから | 7. 自分には必要ないから |
| 4. 近所づきあいで行っているから | 8. 介助者に負担がかかるから |
| | 9. その他() |

次ページの質問10へ

次ページの質問10へ

地震についてお聞きします
— 地震に対する不安・準備していること・知りたい情報など —

質問10. 東京にも、阪神・淡路大震災のような直下型地震が発生すると言われていますが、このような「直下型地震」をどの程度不安に思っていますか。（一つだけ）

- | | |
|---------------|----------------|
| 1. 非常に不安に思う | 5. ほとんど不安に思わない |
| 2. かなり不安に思う | 6. わからない |
| 3. 少しは不安に思う | 7. その他（ ） |
| 4. あまり不安に思わない | |

質問11. 前問の不安について、具体的にどのようなことが心配ですか。（5つ以内）

- | | |
|-------------------------|--------------------|
| 1. 火災の発生 | 11. 塵くずれ・土砂くずれ |
| 2. 家屋の倒壊による下働き | 12. 電気・ガス・水道の途絶え |
| 3. 交通機関の混乱 | 13. 死者の発生 |
| 4. 電話など通信網の混乱 | 14. 室内での家具の転倒や落下物 |
| 5. ガス漏れ | 15. パニックの発生 |
| 6. ブロック塀の倒壊や看板・ガラスなどの落下 | 16. 情報の混乱 |
| 7. 液状化現象による建物の倒壊 | 17. 危険物施設からの油の流出 |
| 8. 地割れ | 18. 避難場所までの避難ができない |
| 9. 高架道路・橋などの倒壊 | 19. 特になし |
| 10. 津波・浸水・堤防の決壊 | 20. その他（ ） |

質問12. あなたが家に居るとき、震度4程度（注）の地震が発生したら、まず何をしますか。（一つだけ）

〔注〕震度4の地震とは、つり下げ物は大きく揺れ、床にある食器類は音をたてる。座りの悪い置物の多くが倒れ、家具が移動することがある。〕

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1. テーブルなどの下にもぐって身を守る | 4. 急いで外に出る |
| 2. 使っている火を消す | 5. そのままの状態様子を見る |
| 3. 戸や窓を開け出口を確保する | 6. その他（ ） |

質問13. あなたの家では、地震に備えて何か準備をしていますか。（いくつでも）

- | | |
|----------------|------------------------------|
| 1. 補器具・補助具の用意 | 9. 現金・通帳などの貴重品 |
| 2. 家具類の固定・転倒防止 | 10. 避難場所・避難経路の確認 |
| 3. 携帯ラジオ | 11. 非常時の連絡など家族との話し合い |
| 4. 懐中電灯 | 12. 非常時の連絡など近所との話し合い |
| 5. ローソク | 13. 間違った救助資器材（ロープ・バルブのこぎりなど） |
| 6. 非常用食料 | 14. その他（ ） |
| 7. 非常用飲料水 | 15. 特に何もしていない |
| 8. 救急医療品 | |

質問14. 東京に大地震が発生した場合、どのような情報を知りたいと思いますか。（3つ以内）

- | | |
|-------------|------------------|
| 1. 火災の発生状況 | 8. 医療機関の情報 |
| 2. 消防隊の活動状況 | 9. 道路など交通機関の状況 |
| 3. 家族などの安否 | 10. 避難すべきか否かの情報 |
| 4. 地震の規模・震源 | 11. 避難場所の状況 |
| 5. 余震の状況 | 12. 食料・水などの確保の状況 |
| 6. 津波の情報 | 13. 死者の発生状況 |
| 7. 被害の状況 | 14. その他（ ） |

現在進められている災害に弱い立場にある方々に対する「災害弱者対策」などについてお聞きします

質問15. 現在、東京消防庁では、体の不自由な方々や一人暮らしで高齢の方々を対象に家庭内で急病などの緊急事態が発生した場合、ペンダントで直接東京消防庁に通報できる「緊急通報システム」を区や市と協力して進めています。あなたはこのシステムをご存じですか。（一つだけ）

- | |
|------------------------|
| 1. すでに設置している |
| 2. システムの具体的な内容まで知っている |
| 3. 名前だけ聞いた事があるが内容は知らない |
| 4. まったく知らない |

質問16. 東京消防庁では、体の不自由な方々や一人暮らしで寝たきりの高齢者など、災害に弱い立場にある方々に対する防災対策の一つとして、隣近所が助け合う「隣保共助体制づくり」をすすめています。あなたは、このようなご近所の方との助け合いが必要だと思えますか。

- | | |
|-----------|---------|
| 1. 必要だと思う | 2. 必要ない |
|-----------|---------|

質問16-(2). 「必要ない」と答えた方にお聞きします。その理由は何ですか。（いくつでも）

- | |
|--------------------------|
| 1. 普段から隣近所との付き合いが無いから |
| 2. 個人の家への出入りはプライバシー侵害だから |
| 3. 他人のことにあまり関わってほしくないから |
| 4. 行政にまかせておけばよいから |
| 5. 面倒だから |
| 6. その他（ ） |

次ページの質問16-(3)へ

次ページの質問17へ

質問16-(3). 「必要だと思う」と答えた方にお聞きします。具体的には、どのような相互の助け合いを望みますか。（3つ以内）

- | |
|-------------------------|
| 1. いざというときに駆けつける |
| 2. 地震や火災の時、避難の手助けをする |
| 3. 時々見回り、言葉を交わす |
| 4. 急病の時など、病院へ連れていく |
| 5. 火災の時に初期消火をする |
| 6. ととき電話をする |
| 7. 必要な場合に応急手当てをする |
| 8. 時々見回り、部屋の片付けや火気点検をする |
| 9. その他（ ） |

質問17. 消防職員が体の不自由な方々や一人暮らしの高齢の方の家へ行って、ガス・電気・石油器具などの点検や、火気使用器具の安全な使い方などの指導を行なう防火診断を推進していますが、あなたの家を訪れるとしたらどう思えますか。（一つだけ）

- | | |
|------------|---------------|
| 1. 来てほしい | 4. はっきり言って迷惑だ |
| 2. 来てもらわない | 5. その他（ ） |
| 3. 何とも思わない | |

質問18. 体の不自由な方々などに対する防火安全対策として、特に強く希望する事項は何ですか。（2つ以内）

- | | |
|--------------------------|------------------|
| 1. 体の不自由な方々のお住まいへの定期的な訪問 | 4. 緊急通報システムの普及 |
| 2. 防災処理製品（燃えにくい製品）の普及 | 5. 隣近所が助け合う体制づくり |
| 3. 火災警報器や自動消火装置の普及 | 6. 特にない |
| | 7. その他（ ） |

最後に、ご回答いただいたことを統計的に分析するため、
あなたご自身のことについてお聞きします

質問1. あなたの年齢をお答えください。

- | | | | |
|----------|---------|---------|----------|
| 1. 10歳未満 | 3. 20歳代 | 5. 40歳代 | 7. 60歳代 |
| 2. 10歳代 | 4. 30歳代 | 6. 50歳代 | 8. 70歳以上 |

質問2. あなたの性別をお答えください。

- | | |
|-------|-------|
| 1. 男性 | 2. 女性 |
|-------|-------|

質問3. 現在、あなたがお住まいの住宅は次のうちどれですか。(一つだけ)

- | | | |
|---------|---------------|-----------|
| 1. 一戸建て | 2. マンション・アパート | 3. その他() |
|---------|---------------|-----------|

質問4. 現在、あなたが暮らしている部屋は何階にありますか。(一つだけ)

- | | | | |
|-------|-------|-------|---------|
| 1. 1階 | 2. 2階 | 3. 3階 | 4. 4階以上 |
|-------|-------|-------|---------|

質問5. 現在、あなたがいっしょに暮らしている方は、あなたを含めて何人ですか。

- | | | |
|----------|-------|---------|
| 1. 一人暮らし | 3. 3人 | 5. 5人以上 |
| 2. 2人 | 4. 4人 | |

質問6. 上の質問で「一人暮らし」以外の方にお聞きします。あなたと一緒に暮らしている人はどなたですか。あなたからみた親類でお答えください。

- | | | | | | |
|--------|------|------|---------|-------|--------|
| 1. 配偶者 | 2. 親 | 3. 子 | 4. 兄弟姉妹 | 5. 友人 | 6. その他 |
|--------|------|------|---------|-------|--------|

質問7. 身体障害者手帳をお持ちの方はその程度を教えてください。(一つだけ)

- | | | |
|-------|-------|-----------|
| 1. 1級 | 4. 4級 | 7. 持っていない |
| 2. 2級 | 5. 5級 | 8. その他() |
| 3. 3級 | 6. 6級 | |

質問8. あなたの障害は次のうちどれですか。

- | | |
|-----------|--------------|
| 1. 上肢機能障害 | 4. 体幹機能障害 |
| 2. 下肢機能障害 | 5. 四肢・体幹機能障害 |
| 3. 四肢機能障害 | 6. その他() |

質問9. あなたが初めて障害を受けた年齢はいつですか。

- | | | |
|----------|---------|------------|
| 1. 10歳未満 | 4. 30歳代 | 7. 60歳以上 |
| 2. 10歳代 | 5. 40歳代 | 8. 生まれた時から |
| 3. 20歳代 | 6. 50歳代 | |

質問10. あなたは外出が一人でできますか。それとも介助が必要ですか。

- | | | |
|----------------------|-------------|--------|
| 1. 一人でできる | 3. 一部介助が必要 | |
| 2. 補助具・福祉具があれば一人でできる | 4. いつも介助が必要 | 5. その他 |

◆ 最後に、このアンケートの記入者を教えてください。

- | | |
|-------|---------|
| 1. 本人 | 2. 本人以外 |
|-------|---------|

ご協力ありがとうございました